

じまんの大好きなお兄ちゃん

谷川 たにがわ 純白 ましろ

ぼくは、同じイノシシ年生まれの兄に感じやします。両親は、仕事や家事におわれいそがしく、毎日バタバタしています。そこで、末っ子のぼくの世話を兄がしてくれます。もの心ついたところから、おふろはいつも兄がいつしよに入ってくれました。勉強も見てくれます。ぼくがこまっているときは、一番最初に兄に相談します。兄で手に負えないときにはじめて、両親に相談することになっています。とてもたのしい兄です。先日、授業参観に来てくれました。いつもは、父か母が来るのですが、その時は、仕事の都合でどうしても来ることができませんでした。ぼくが、どうして来てくれないのと母に食い下がっていたら、兄が「ぼくでよかつたら行こうか。」と母に言ってくれました。

「ええー、お兄ちゃん。」と言ったけど、ぼくは、内心はよろこんでいました。兄は大学四年で、とてもかっこいいです。いろんなことをぼくに教えてくれます。そんなじまんの兄を、クラスのみんなに見せることができるからです。一週間後の授業参観を指折り教えて待ちました。

授業参観の日、算数の授業が始まりました。後ろをふり返りましたが、兄の姿が見えません。本当に来てくれるか不安になりました。五分がすぎても、まだ来ません。この五分間は、長く長く感じました。授業どころではありません。先生の声も耳に入らないくらいでした。ろうかで動く人かげを見るたびに、

気をそがれました。

十分を過ぎたころ、兄が教室に入ってきました。本当に来てくれた。ホッとしました。後は、大好きなお兄ちゃんの前で、いいところを見せる番です。「この問題わかる人。」先生の声に、大きく「ハイ。」と手を上げました。得意な算数の授業です。この時のため、前の日は、こっそり予習をしました。むねをはって、自信たっぷり、黒板へ向かい問題をときました。先生もほめてくれました。

自分の机にもどるとき、お兄ちゃんに、こっそりVサインを送りました。お兄ちゃんは、音が出ないように、はく手をしてくれました。

参観が終了し兄が帰った後、教室内がさわぎになりました。クラスの女の子たちが、「あの人だれ。」「カッコいい。」などざわついていました。ぼくは、心の中で「ぼくのお兄ちゃんだぞ。」とさげびました。間もなく、「純白君のお兄ちゃん。カッコよすぎ。」女の子が声をかけてきました。ぼくは、鼻高々でした。

「五人兄弟だけど、同じえとだから、特に仲がいいんだよ。」「見た目だけじゃなくて頭もいいんだよ。」お兄ちゃんのこといつもお世話をしてくれて、本当にありがとう。お兄ちゃん。